

新見公立大学紀要 第33巻
pp. 11–19, 2012

原 著

認知症対応型グループホームでの老年看護学実習における学生の学び —短期大学教育での実習目標への帰納的な分析から—

木下 香織*・古城 幸子・馬本 智恵

老年看護学

(2012年11月12日受理)

本研究の目的は、短期大学教育で実施した認知症対応型グループホームでの老年看護学実習における学生の学習内容を実習目標に沿って帰納的に評価し、今後の教育上の示唆を得ることである。対象は、2011年度に臨地実習を経験したA短期大学看護学科3年次生であった。研究方法は、老年看護学実習終了時に学びを焦点化する記録用紙に記載された内容を実習目標に照合して帰納的に分類したうえで、内容の類似性に着目してカテゴリー化を行った。学生が焦点化した学びの内容は9つの実習目標を網羅していた。高齢者の生活の場であるグループホームでの実習の学びの特徴として、高齢者を肯定的に理解すること、「集団と個人」の視点での高齢者理解、認知症の高齢者への具体的な援助方法、高齢者の人生の過程への注目や現在から未来につながる目標の共有が挙げられた。一方で、今後の教育上の課題として、高齢者の健康や看護上の課題に関する学びの充実を図ることが示唆された。

(キーワード) 老年看護学, 認知症対応型グループホーム, 臨地実習, 学び

はじめに

A短期大学看護学科では、平成8年の看護教育カリキュラムの改正に伴って、臨地実習が2単位から4単位となった平成11年の臨地実習から、実習施設を高齢者施設と病院とで複合的な実習展開へと変更した。複数の実習施設での実習を経験した学生は、「人生の先輩として尊敬できる高齢者の姿」「高齢者の包容力と畏敬の念」など高齢者のポジティブな側面を実感し、高齢者理解が深められていることが確認できた¹⁾。その後、高齢者施設におけるIncidentの特徴^{2) 3)}、学生が臨地実習で体験した看護ジレンマに焦点をあてた臨地実習の教育評価を重ねながら、平成21年からは認知症対応型グループホームでの実習をおこなっている。

日本看護協会「介護施設における看護の機能強化に関する検討委員会」の報告⁴⁾によると、看護基礎教育機関における老年看護学の実習施設としては、高齢者施設と病院の両方での実習を実施する機関が61.7%で最も多く、病院のみは20.4%、高齢者ケア施設のみが15.5%であった。一方、看護学生の将来の高齢者対象の職場選択への意思に関連する要因として、臨地実習での高齢者理解の深化や高齢者差別の弱さが指摘されている⁵⁾。看護基礎教育における老年看護学実習での体験や学習の影響が大きいことから、学生が高齢者理解をより豊かにし、高齢者看護の魅力や意義を感じられる臨地実習となるよう実習環

境を整備することは、老年看護学教育における重要な課題である。

高齢者ケア施設における臨地実習での看護学生の学びについて、介護老人保健施設に関する報告がいくつかある。千葉ら⁶⁾は、老人保健施設で受け持ち高齢者を対象に日常生活支援を中心にした看護過程を展開する実習を行った看護学生の実習記録を分析した。その結果、高齢者一人ひとりの個別性を重視した援助課題の明確化と、より個別性の高い看護実践へのプロセスを経験し、高齢者のQOLを考慮した看護過程の理解、高齢者との関わり方の理解、高齢者の生活の場である施設と利用者の特徴の理解、高齢者介護施設での看護職の役割の理解など、実習の学習目標を達成する学びが得られていたと報告している。また、認知症高齢者ケアに特化した老人保健施設での2日間の実習を行った学生が実習前後に記述したレポートを分析した結果、対象理解、生活の場の重要性や感情に着目したケアを学んでいたとの報告⁷⁾もあった。さらに、複数の実習施設における老年看護学実習での学習成果として、小林ら⁸⁾が2年次に介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人福祉センターにおいて計1週間の実習を経験した学生の学習成果をまとめている。学生、教員ともに「高齢者を尊重する態度」に関する実習目標の評価が高く、3種類の異なる施設での体験は、高齢者の生活の場に対する視野を広げる要因となったことを報告している。

*連絡先：木下香織 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

しかし、認知症高齢者の生活の場であるグループホームにおける臨地実習に関する報告は、同一の教育機関で実施した一日実習での学生の学びの報告^{9) 10)}のみであった。そこで、短期大学教育で実施した認知症対応型グループホームでの老年看護学実習における高齢者理解に関する学習内容を、実習目標に照らして帰納的に明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。

I. 研究目的

認知症対応型グループホームにおける老年看護学実習での高齢者理解に関する学びを実習目標に沿って帰納的に評価し、今後の教育上の示唆を得る。

II. A 大学看護学部看護学科の老年看護学実習

1. A短期大学での老年看護学実習の実習施設と実習形態の変遷

A大学の前身であるA短期大学看護学科での老年看護学実習の変遷を表1に示した。平成8年の看護教育カリキュラムの改正以前には、指定規則である臨地実習2単位のうち、1単位を2年次に学生の出身地の高齢者施設で行い、3年次に特別養護老人ホームでの1単位の実習を行っていた。カリキュラムが改正された平成8年度の入学生から、3年次の臨地実習の実習施設を高齢者施設と病院とで複合的な実習展開へと変更した(1999年)。初年度の実習を経験した学生の実習記録を分析した結果、「人生の先輩として尊敬できる高齢者の姿」「高齢者の包容力と畏

敬の念」など高齢者のポジティブな側面を実感し、高齢者理解が深められていることが確認できた¹¹⁾。翌年(2000年)からは、1週間毎に実習施設が変わることによる学生の実習の学びの深化への影響を考慮し、1名の学生が2週間と1週間で2種類の施設での実習を経験する実習展開へと変更した。同時期に実習する学生全員で学内でのカンファレンスを行うことにより、学生が実習を経験しない高齢者施設で生活する高齢者の特徴、看護職の役割や他職種との連携のあり方の違いを学ぶ機会を設ける工夫を行ってきた。2004年からは複数の実習施設のなかに認知症対応型グループホームを追加、2007年からは在宅高齢者の理解と介護予防活動の実践を目的とした実習内容(サテライト・デイ)を追加した。認知症対応型グループホームでは、利用者体験を通じて学生は、施設を利用する高齢者の心理や認知症高齢者の理解と学生自身の主観的な感情を基礎に、専門職として求められる援助について学んでいた¹²⁾。認知症高齢者の理解を深め、認知症高齢者ケアを学ぶことは老年看護学実習の目的から意義のあることと考え、2009年から3年次の実習施設は認知症対応型グループホームのみとし、介護予防活動の実践を行う内容と組み合わせた3週間の実習を行ってきた。

また、A短期大学看護学科の老年看護学実習では、学生は施設内での生活に合わせて、スタッフの指導のもと高齢者の生活支援に参加している。受け持ち高齢者を定め、その高齢者を対象とした看護過程の展開を行うことは実習内容に含んでいない。A短期大学の成人看護学実習では、受け持ち患者に老年期の患者を選定することが多く、高齢者を対象に看護過程の展開を行う臨地実習を

表1 A短期大学・大学の老年看護学実習の変遷

	時 期	実習施設	備 考
短 期 大 学	～1998(平成10)年度	特別養護老人ホーム	2単位のうち、1単位は2年次
	1999(平成11)年度	特別養護老人ホーム 介護療養型医療施設 老人保健施設	4単位のうち、1単位は2年次 各施設で1週間ずつ実習
	2000(平成12)年度～	特別養護老人ホーム 介護療養型医療施設 老人保健施設	4単位のうち、1単位は2年次 2週間と1週間、2施設での実習を経験する
	2004(平成16)年度	特別養護老人ホーム 介護療養型医療施設 老人保健施設 認知症高齢者グループホーム	
	2005(平成17)年度～	特別養護老人ホーム 介護療養型医療施設 認知症高齢者グループホーム	
	2007(平成19)年度～	特別養護老人ホーム 介護療養型医療施設 認知症高齢者グループホーム	4単位のうち、1単位は2年次 2週間と1週間、2施設での実習を経験する 3週目、最終日にサテライト・デイを実施
	2009(平成21)年度～	認知症高齢者グループホーム	4単位のうち、1単位は2年次 3週目、最終日にサテライト・デイを実施
大 学	2012(平成24)年度～	認知症高齢者グループホーム	4単位のうち、2単位は「生活支援看護学 実習」として実習

経験することから、学生の学習に大きな支障は生じないと考えている。

2. A 短期大学での老年看護学実習の実習目標

A 短期大学での老年看護学実習の実習目的、実習目標は以下のとおりである。

〈実習目的〉

老年看護の対象としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者個人の人權を尊重し、高齢者およびその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う。

〈実習目標〉

1) 高齢者を総合的に理解する。(主に老年看護学実習の中で)

- ①高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する(person)
- ②高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する(problem)
- ③家庭、介護保険施設(保健・医療・福祉)など高齢者の生活の場を理解する(place)
- ④高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する(process)
- ⑤個々の高齢者のQOLを高めるための援助のゴールを理解する(purpose)
- ⑥高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する(perspective)
- ⑦高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する(professionalism)
- ⑧高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する(person-in-environment)

2) 高齢者の健康問題に対する看護過程の展開ができる。(主に成人看護学実習の中で)

- ①老化の過程を理解し、その高齢者の健康問題に対する反応を捉え、問題を明確にできる。
- ②高齢者の健康問題に対する看護上のゴールが設定できる。
- ③高齢者の健康問題が日常生活に及ぼす影響を理解し、生活機能に視点をおいた援助計画を立案できる。
- ④高齢者のQOLを高める看護が実践できる。
- ⑤評価ができる。

3) 老年看護の継続性や在宅保健・医療・福祉についての実際を理解する。(主に地域看護学実習の中で)

- ①高齢者の生活の場と、介護する家族の状況を理解する。
- ②在宅における生活の援助、訪問看護活動についての実践ができる。
- ③在宅ケアを充実するための社会資源の活用や地域のサポートシステムが理解できる。

④在宅ケアを支える他の専門職との連携を理解できる。

4) 自己の老年看護観を深める。(実習体験を通して)

①自己の老年期のイメージを明確にできる。

②実習を通して、自己の老年看護観を深めることができる。

③現在の社会の抱える高齢者の課題について関心を持ち、多様な見解を学ぶことができる。

④将来の高齢社会の課題について、看護の役割と機能について自己の考えを明確にできる。

3. A 大学での老年看護学実習の臨地実習と実習目標

A 短期大学での教育の経過をふまえて、A 大学での老年看護学の臨地実習は、認知症対応型グループホームにおける2単位の「老年看護学実習」と、従来、老年看護学実習でおこなっていた地域の在宅高齢者を対象とした介護予防活動を実践する実習内容を独立させた2単位の「生活支援看護学実習」とで構成した。そのうち、「老年看護学実習」の実習目的、実習目標を以下のとおりとした(資料)。短期大学教育における実習目標のうち、高齢者理解に関連する『8つのP』¹³⁾に、「学生自身の看護専門職としての成長」についての項目を追加した『9つのP』として設定し、その構造(図)とともに学生に示している。

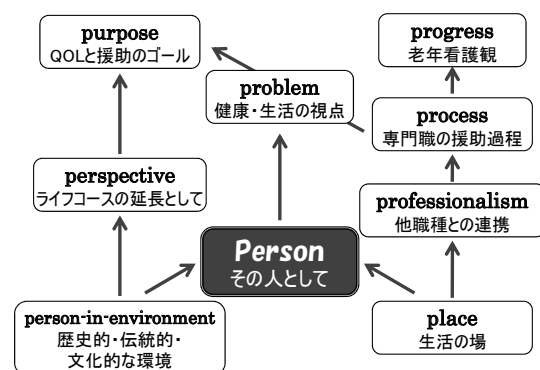


図 老年看護学実習目標の構造

III 研究方法

1. 対象

2011年度に老年看護学実習を経験したA 短期大学看護学科3年次生

2. 方法

1) 分析対象

63名の学生が老年看護学実習終了時に学びを焦点化して提出した「2つの学び」カード(以下、カードとする)を分析対象とした。カードは、3週間の実習期間の終盤に、学生が実習中の経験を振り返り、印象に残った2つの学び

資料 A大学の老年看護学実習の臨地実習と実習目標

〈実習目的〉

老年看護の対象としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者個人の人權を尊重し、高齢者およびその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う。

〈実習目標〉

- 1) 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する(person)
 - ①身体的、精神的、社会的側面での老いに伴う喪失が理解できる。
 - ②個々の高齢者の価値観を知り、個別性と多様性が理解できる。
 - ③さまざまな経験に基づいた知恵や力をもつ存在であることが理解できる。
 - ④人生の先輩として的高齢者を敬い、尊重できる。
- 2) 高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する(problem)
 - ①身体的、精神的、社会的な老いの過程が理解できる。
 - ②疾病やADLの低下による生活障害がアセスメントできる。
 - ③高齢者の抱える生活上の課題とその支援の方向性が理解できる。
- 3) 家庭、介護保険施設(保健・医療・福祉)など高齢者の生活の場を理解する(place)
 - ①通所型サービスを利用する在宅高齢者の生活の現状が理解できる。
 - ②入所型介護保険施設の利用者の生活の場が理解できる。
 - ③グループホームなど高齢者関連施設の利用者の生活の場が理解できる。
 - ④生活の場における高齢者のなじみの関係が理解できる。
 - ⑤高齢者関連施設の果たす役割と機能が理解できる。
- 4) 高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する(process)
 - ①生活障害によるADL低下のある高齢者の支援が実践できる。
 - ②認知症高齢者への関わり方とコミュニケーションの重要性が理解できる。
 - ③医療依存度の高い高齢者への看護について理解できる。
 - ④終末期にある高齢者への援助のあり方が理解できる。
- 5) 個々の高齢者のQOLを高めるための援助のゴールを理解する(purpose)
 - ①個々の高齢者のQOLについて理解できる。
 - ②個々の高齢者のQOLに影響を与える要因が理解できる。
 - ③個々の高齢者のQOLを高めるための支援と実践ができる。
- 6) 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する(perspective)
 - ①バイオグラフィーへの記述をとおして、過去から現在、そして未来の高齢者の身体・非身体の像が理解できる。
 - ②バイオグラフィーの分析をとおして、価値観や人生観が個々の生活背景から形づくられていることが理解できる。
 - ③高齢者の人生と生活に深くかかわる家族の存在が理解できる。
- 7) 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する(professionalism)
 - ①健康から虚弱、疾病、回復のサイクルの中で、老年看護の専門性を発揮するさまざまな場とその重要性が理解できる。
 - ②保健・医療・福祉に関わる他の専門職との連携と協働が理解できる。
 - ③老年看護に関わる社会資源の活用や地域のサポートシステムが理解できる。
- 8) 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する(person-in-environment)
 - ①生活歴や職歴、教育歴など高齢者の個人的な文化が理解できる。
 - ②方言や風習など、高齢者の生活する地域の文化が理解できる。
 - ③戦争などの社会の変動から、高齢者の人生に影響を与えた時代的な文化が理解できる。
- 9) 学習の成果と今後の課題を明確にする(progress)
 - ①自己の老年期のイメージを明確にできる。
 - ②自己の老年看護観を深めることができる。
 - ③高齢社会の課題を理解し、看護の役割と機能について自己の考えを明確にできる。

を記載する用紙で、学びを得た場面の具体的な内容とその学びにテーマをつける形式になっている。

2) 分析方法

カードに記入された内容から、研究者が学生の学びを象徴していると思われる表現をコードとして抽出した。次に、抽出したコードを実習目標『9つのP』と照合して帰納

的に分類したうえで、内容の類似性に着目してカテゴリー化を行った。本研究では、大学教育での老年看護学実習の指導への示唆を得ることをねらいとするため、前述の『9つのP』に照らして、帰納的に分析することとした。分析結果の信頼性を確保するために、共同研究者3名で討議し、分析内容の妥当性を検討した。

3. 倫理的配慮

臨地実習の成績評価を終了した後、学生に研究の趣旨と方法を説明し、研究への協力は任意であり、協力の有無により不利益を被らないこと、分析の際には個人が特定されないようプライバシーに配慮すること、分析結果は成績評価に影響しないことなどを説明し、同意を得た。

IV 結果

63名の記述内容から132個の学びを抽出し、9つの実習目標に沿って分類し、さらにカテゴリー化した結果を表2に示した。最も学びが多かったのは『4. 高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する』で58個、次に『1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する』が29個であった。以下、カテゴリーを〈 〉、コードを「 」で示す。

1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する

『高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する（以下、1. personとする）』では、29コードから〈言動の意味の理解〉〈精神面の理解〉〈個別性の理解〉〈成長する力〉〈社会的存在としての力〉〈身体面の理解〉〈自尊

感情の理解〉の7個のカテゴリーを形成した。

〈言動の意味の理解〉は7コードであった。「認知症高齢者の行動の意図を理解することで親身になって対応できる」「行動を多方面から考えることで、高齢者の個性をプラスにとらえることもできる」「コミュニケーションをとって生活背景を知ることがその人の発言や態度を理解する手掛かりになる」など、高齢者の言動の意味を理解することの大切さを挙げていた。

〈精神面の理解〉は7コードであった。「認知症高齢者の“忘れてしまう”辛さを実感」「一瞬の言葉の中にその人の伝えたい本心がある」「遠慮をするなど一人一人の性格を見極めた対応の仕方」など、高齢者の認知症による不安を理解すること、言葉で表現されない思いを理解することが挙がっていた。

〈個別性の理解〉は5コードで、「利用者の個々の性格や状況に応じた対応の必要性」「訴えや生活背景などをありのままに受け止めることが大切」などであった。

〈成長する力〉は4コードで、「人は死ぬまで学び続けることができる」という可能性を信じる」「残存機能が発揮しやすい利用者のアセスメントが大切」などであった。

〈社会的存在としての力〉は3コードで、「認知機能は低下していても、人として大切な相手を思いやることが自然になされており、尊重しながら受け止めていくことが大切である」「寛大さや優しさなどの高齢者の“力”は残っている」などであった。

〈身体面の理解〉は、「体調や気分による高齢者の力の変化に気づいて対応していくことの大切さ」「反応の少ない高齢者に“できない”と決めつけないで関わる大切」の2コードであった。

〈自尊感情の理解〉は、「相手の気持ちを受け止めていくとともに、自分の行為や存在を少しでも肯定的に受け止められるように聞く姿勢を持ち関わっていくことが大切」の1コードであった。

2. 高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する

『高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する（以下、2. problemとする）』では、4コードで〈身体的老化の理解〉のカテゴリーにまとめることができた。「バランスを崩しやすい高齢者の危険を予知する大切さ」「先入観で判断すると体調の変化を見逃してしまう」など、加齢による身体的変化が高齢者にもたらす影響や高齢者の健康問題の特徴をふまえた観察の重要性を挙げていた。

3. 家庭、介護保険施設(保健・医療・福祉)など高齢者の生活の場を理解する

『家庭、介護保険施設(保健・医療・福祉)など高齢者の生活の場を理解する（以下、3. placeとする）』では、7

表2 実習目標と学生の学び

実習目標「9つのP」と学びのカテゴリー		
1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する。〈person〉		(29)
言動の意味の理解 (7)	社会的存在としての力 (3)	
精神面の理解 (7)	身体面の理解 (2)	
個別性の理解 (5)	自尊感情の理解 (1)	
成長する力 (4)		
2. 高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する。〈problem〉		(4)
身体的老化の理解 (4)		
3. 家庭、介護保険施設(保健・医療・福祉)など高齢者の生活の場を理解する。〈place〉		(7)
安全への配慮 (3)	生活の場 (3)	
社会との交流のある場 (1)		
4. 高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する。〈process〉		(58)
安心感 (12)	関係性 (2)	
コミュニケーション (11)	安全 (2)	
個別性のあるケア (7)	環境の調整 (2)	
レクリエーション (7)	具体的な説明 (1)	
気分転換 (6)	役割 (1)	
納得や理解を得る (3)	思いへの共感 (1)	
一瞬一瞬を大切にケア (3)		
5. 個々の高齢者のQOLを高めるための援助のゴールを理解する。〈purpose〉		(6)
役割 (4)	QOL (2)	
6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する。〈perspective〉		(7)
生きてきた過程の理解 (7)		
7. 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する。 〈professionalism〉		(15)
倫理的なケア (8)	生活の場作り (1)	
ケア専門職としての力量 (2)	利用者との信頼関係 (1)	
他職種や家族との連携 (2)	認知症の進行予防 (1)	
8. 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する。 〈person-in-environment〉		(3)
人的・物的・地域的環境 (3)		
9. 学習の成果と今後の課題を明確にする。〈progress〉		(3)
高齢者観の変化 (3)		

コードから〈安全への配慮〉〈生活の場〉〈社会と交流のある場〉の3個のカテゴリーを形成した。

〈安全への配慮〉は3コードで、「生活の場としての環境や安全への仕組み」「日常生活の中での転倒や温度設定など安全面への配慮」などであった。

〈生活の場〉は3コードで、「ここが家であり家族のような生活の場の提供」「少人数のグループホームでは、病院ではできない季節感のある行事ができる」などであった。

〈社会と交流のある場〉は「人との交流が身だしなみに表現される在宅と施設の違い」の1コードであった。

4. 高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する

『高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する（以下、4. processとする）』では、58コードから〈安心感〉〈コミュニケーション〉〈個別性のあるケア〉〈レクリエーション〉〈気分転換〉〈納得や理解を得る〉〈一瞬一瞬を大切にしたいケア〉〈関係性〉〈安全〉〈環境の調整〉〈具体的な説明〉〈役割〉〈思いへの共感〉の13個のカテゴリーを形成した。

〈安心感〉は12コードで、「不安な気持ちを少しでも和らげるような関わりや声かけをしていくことが大切」「手を取り、微笑み、側にいるという事だけでも安心感を与えることができる」「相手の立場になって心に寄り添うケアを行っていくことの大切さ」「悲しい、辛い、負の感情を楽しいことに切り替えることが大切」などであった。認知症高齢者の不安への対応として、言語的、非言語的に高齢者の気持ちや世界に寄り添うことの重要性を挙げている。

〈コミュニケーション〉は11コードで、「閉ざされた質問や選択肢のある質問をするようなコミュニケーションも、その人の思いを話すきっかけを作りだす大切なものである」「タッチングや寄り添うなどの非言語的コミュニケーションも大切なコミュニケーション」「言葉だけでなく表情をみて、気持ちを考えて関わるのが大切」などであった。認知症による言語的な表現の困難を補うようなコミュニケーションの工夫や非言語的なコミュニケーションの重要性を挙げている。

〈個別性のあるケア〉は7コードで、「利用者のペースに合わせた日常生活ケア」「体調に合わせた個別性のあるケアの大切さ」「相手の立場で考え、本人の意思を妨げない関わりが大切」など、個人のペースや体調に合わせた日常生活の援助や認知症高齢者の意思を汲み取れるように関わることの大切さを挙げている。

〈レクリエーション〉は7コードで、「レクリエーションでは、個人にあった楽しみ方ができることが大切」「本人が楽しいと感ずることができることが大切」「自分が楽しまなければ利用者は楽しむことができない」など、高齢者

に合わせた個別的な対応により楽しくレクリエーションが行えることに加えて、楽しいレクリエーションの運営のために援助者の楽しむ気持ちも大切であることが挙げられていた。

〈気分転換〉は6コードで、「楽しい方向へ気持ちや行動を向けることも大切な役割である」「季節感を感じる散歩の効果」「外出・外食などの気分転換は胸弾む刺激になる」など、高齢者の気分転換を図る具体的な援助とその効果が挙げられていた。

〈納得や理解を得る〉は3コードで、「“知”の部分に働きかけることが納得や理解や安心につながる」「高齢者の理解できる言葉の選択の重要性」などであった。

〈一瞬一瞬を大切にしたいケア〉は3コードで、「忘れてしまう認知症高齢者だからこそ一瞬一瞬の小さな幸せ」「認知症高齢者の一瞬一瞬大切にしたい関わりが重要」などであった。

〈関係性〉は、「周囲になじめない、孤立しがちな高齢者にはスタッフが間をとりもつことも必要」などの2コードであった。

〈安全〉は、「安全への配慮の大切さと難しさ」などの2コードであった。

〈環境の調整〉は、「その時、その場面の環境を整えながら寄り添い、関わっていくことの大切さ」「環境などの状況の変化に応じた、観察、見守りを行うことの必要性」の2コードであった。

〈具体的な説明〉は、「視覚的な情報と具体的な説明が理解を促すために必要」の1コードであった。

〈役割〉は、「ホームでの居場所づくりや頭の体操となる役割の大切さ」の1コードであった。

〈思いへの共感〉は、「話を聞き相手の思いを共感、共鳴することの難しさ」の1コードであった。

5. 個々の高齢者のQOLを高めるための援助のゴールを理解する

『個々の高齢者のQOLを高めるための援助のゴールを理解する（以下、5. purposeとする）』では、6コードから〈役割〉〈QOL〉の2個のカテゴリーを形成した。

〈役割〉は4コードで、「必要とされる存在であることが利用者の居場所になる」「目の前の小さな目標の設定と達成の継続が大切」などであった。

〈QOL〉は、「1人1人にあったケアをすることはQOLを高める手助けにも結びついていく」「生活の場では何より高齢者の心の安定を図ることが大切」の2コードであった。

6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する

『高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解

する（以下、6. perspective とする）』では、7コードで〈生きてきた過程の理解〉のカテゴリーにまとめることができた。「過去の鮮明な記憶を語る時間が重要」「その方の人生に関心を持って話に耳を傾け、頑張りやをねぎらうような関わりをしていくことが大切」「認知症高齢者の言動には一人一人の生きてきた過程が関係している」など、個々の生活歴が現在の高齢者の言動につながっていることや、戦争体験など高齢者の経験を聴くことの大切さを挙げていた。

7. 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する

『高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する（以下、7. professionalism とする）』では、15コードから〈倫理的なケア〉〈ケア専門職としての力〉〈他職種や家族との連携〉〈生活の場作り〉〈利用者との信頼関係〉〈認知症の進行予防〉の6個のカテゴリーを形成した。

〈倫理的なケア〉は8コードで、「利用者の思いや自己決定の促し、役割意識への配慮が必要である」「非言語的なコミュニケーションを含めて自尊心を低下させない関わりが大切」「安全を考える見守りと自由さを奪う監視の違いに気づく」など、認知症高齢者の自己決定の尊重や自尊心に配慮した関わりの方の大切さ、ケアの受け手の立場で援助を振り返った気づきを挙げていた。

〈ケア専門職としての力量〉は、「高齢者の行動にヒントを得てケアにつなげていく“ケアの引き出し”」「高齢者に若い自分ができるのは、今と未来の不安を減らし、楽しい今と未来をつくること」の2コードであった。

〈他職種や家族との連携〉は、「病院との連携や他職種間の信頼関係の重要性」「水分摂取を勧めるための家族との連携」の2コードであった。

〈生活の場作り〉は、「家庭的なグループホームの機能と安心感を支える専門職の役割」の1コードであった。

〈利用者との信頼関係〉は、「毎日の丁寧な関わりが認知症高齢者との信頼関係をつくる」の1コードであった。

〈認知症の進行予防〉は、「認知症に対する進行予防としての関わり方」の1コードであった。

8. 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する

『高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する（以下、8. person-in-environment とする）』では、3コードで〈人的・物的・地域的環境〉のカテゴリーにまとめることができた。「スタッフの存在は頼みの綱であり支えである」「季節を実感したり、なじみの地域に出かける施設外活動の意味」などであった。

9. 学習の成果と今後の課題を明確にする

『学習の成果と今後の課題を明確にする（以下、9. progress とする）』では、3コードで〈高齢者観の変化〉のカテゴリーにまとめることができた。「一緒に過ごすことで優しさを感じ、安心感が持てる高齢者の存在」「“認知症”というイメージの変化」など、高齢者イメージや認知症の理解の深まりを示す内容であった。

V 考察

63名の学生が学びを焦点化した「2つの学び」カードの記載内容から132コードを抽出し、実習目標「9つのP」への帰納的な分類とカテゴリー化によって、学生の学習内容を分析した。認知症対応型グループホームでの老年看護学実習における学生の学習内容の特徴と今後の教育上の課題について考察する。

1. 高齢者理解の視点と高齢者観の変化

1. person では、身体的、精神的、社会的な側面それぞれの高齢者理解に関する学びが挙げられていた。なかでも、「“人は死ぬまで学び続けることができる”という可能性を信じる」などの〈成長する力〉や「寛大さや優しさなど的高齢者の“力”は残っている」などの〈社会的存在としての力〉は、肯定的な側面の高齢者像の深化を示している。3. Place では「人との交流が身だしなみに表現される在宅と施設の違い」の〈社会と交流のある場〉が、4. process では「周囲になじめない、孤立しがちな高齢者にはスタッフが間をとりもつことも必要」などの〈関係性〉の内容も挙げられていた。9. progress では、高齢者イメージや認知症の理解の深まりを示す〈高齢者観の変化〉が挙げられた。学生は、9名の利用者とケアスタッフの生活感あふれる日常の営みに身を置くことで、高齢者同士や高齢者とケアスタッフとの交流場面を目の当たりにしながら、「集団と個人」の視点での高齢者理解ができたことを示している。老人保健施設で看護過程を展開する老年看護学実習での学生の学び¹⁴⁾では、上記と関連する『高齢者の特徴の理解』として、「身体的な側面の理解」や高齢者の心の豊かさや潜在能力など「高齢者の能力の発見」など類似した内容も挙げられているが、社会的な側面での高齢者理解に関する内容は見られなかった。受け持ち高齢者への看護過程の展開を中心とする実習形態では、学生は問題解決思考となりやすいために高齢者が援助を必要とする側面、看護上の課題へと関心が向けられやすい。特定の高齢者を受け持つのではなく、9名の高齢者との生活を共にした実習形態やグループホームという実習施設の特徴によって高齢者理解が深められていると考えた。

2. 認知症高齢者の看護についての学び

学生が記入した学びのうち、4. process に関する内容が最も多く、全体の約半数を占めていた。なかでも、認知症高齢者の不安への対応として、言語的、非言語的に高齢者の気持ちや世界に寄り添うことの重要性を挙げた〈安心感〉、認知症による言語的な表現の困難を補うようなコミュニケーションの工夫や非言語的なコミュニケーションの重要性を挙げた〈コミュニケーション〉は、4. Process の全コードの1/3を占め、多くの学生にとって印象深い学びとなっていた。そのほかにも、認知症高齢者への対応方法に関する内容として、「高齢者の理解できる言葉の選択の重要性」などの〈納得や理解を得る〉、「忘れてしまう認知症高齢者だからこそ一瞬一瞬の小さな幸せ」「認知症高齢者の一瞬一瞬大切にしたい関わりが重要」などの〈一瞬一瞬を大切にしたいケア〉、「視覚的な情報と具体的な説明が理解を促すために必要」とした〈具体的な説明〉、「ホームでの居場所づくりや頭の体操となる役割の大切さ」の〈役割〉、「話を聞き相手の思いを共感、共鳴することの難しさ」の〈思いへの共感〉も挙がっていた。実習開始当初、認知症高齢者との関係性を構築する初期の段階では、学生は認知症高齢者の言動に戸惑いを感じることも多い¹⁵⁾が、対応方法を試行錯誤した成果として、認知症高齢者への対応について体得していることが確認できた。

また、認知症高齢者への対応において、個々の高齢者の生活背景の理解は欠かせない。1. person では、「コミュニケーションをとって生活背景を知ることがその人の発言や態度を理解する手掛かりになる」などの〈言動の意味の理解〉、「遠慮をされるなど一人一人の性格を見極めた対応の仕方」などの〈精神面の理解〉、「訴えや生活背景などありのままに受け止めることが大切」などの〈個別性の理解〉と、個々の高齢者への深い関心がうかがえた。6. perspective では、「その方の人生に関心を持って話に耳を傾け、頑張りをねぎらうような関わりをしていくことが大切」「認知症高齢者の言動には一人一人の生きてきた過程が関係している」など〈生きてきた過程の理解〉を挙げており、個々の生活背景をふまえた個別性のある支援の必要性の理解につながっている。

さらに、7. professionalism では、認知症高齢者の自己決定の尊重や自尊感情に配慮した関わり大切さ、ケアの受け手の立場で援助を振り返った気づきを挙げた〈倫理的なケア〉、「高齢者の行動にヒントを得てケアにつなげていく“ケアの引き出し”」などの〈ケア専門職としての力量〉、「病院との連携や他職種間の信頼関係の重要性」などの〈他職種や家族との連携〉といった学びも得られている。他の臨地実習や卒業後の臨床においても、認知症のある対象者の看護を経験する機会は多く、認知症高齢者への対応について多くの学びが得られていることは意義

深い。

3. 高齢者ケアにおける目標設定と援助方法

6. perspective の〈生きてきた過程の理解〉のカテゴリには、「その方の人生に関心を持って話に耳を傾け、頑張りをねぎらうような関わりをしていくことが大切」など、戦争体験に代表される高齢者の経験を聴くことの大切さも挙げられていた。また、5. purpose では、「必要とされる存在であることが、利用者の方の居場所になる」「目の前の小さな目標の設定と達成の継続が大切」などの〈役割〉、「1人1人にあったケアをすることはQOLを高める手助けにも結びついていく」「生活の場では何より高齢者の心の安定を図ることが大切」の〈QOL〉が挙がっていた。高齢者の生活の場におけるケアの目標が、平穏な生活の中で高齢者が役割を発揮するなど、身近な事柄にあることを学んでいた。また、高齢者の生活背景の理解が日常の言動の理解や個別的な目標設定につながることから、高齢者の過去から現在までの生活歴と現在から未来につながる目標の共有の重要性についても学んでいた。そして、具体的な援助として、4. process で〈レクリエーション〉〈気分転換〉など、集団を対象としたケア方法が挙げられたことは、9名の利用者の生活に関わる実習形態での学びの特徴といえる。

4. 今後の教育上の課題

高齢者理解に関する内容として、心理的、社会的な側面での学びが多く挙げられた一方で、身体面の理解や看護上の課題に関する内容は少なかった。多くの高齢者が複数の疾患を併せ持ちながら日常生活を送っており、グループホームで生活する認知症高齢者においては、体調の異変を自ら察知し表現することに困難も生じやすい。しかし、グループホームで生活する高齢者は、基礎疾患をもっているも小康状態にあることが多いことから、高齢者の通院に同行したり施設の記録を目にしなければ、高齢者の健康問題に関する情報を得る機会は少ない。高齢者の健康や看護上の課題に関する学びの充実を図ることが今後の教育上の課題として示唆された。感覚機能の低下や筋力低下などの加齢現象や個々の高齢者の既往歴が日常生活に与える影響を最初の手がかりとして、身体的側面での課題の所在や支援について理解が深められるような指導方法の検討が必要である。

また、本研究では、学生が実習での学びを焦点化した記録の内容を分析したことから、認知症対応型グループホームでの学習内容のうち、学生にとって印象深い学びとなっている。今後は、学生の「実習での学び」の全体像を把握し、より詳細に教育評価をしていくことも課題である。

謝辞

本研究への協力にご承諾いただいた A 短期大学看護学科の 2011 年度 3 年次生の皆さまに心から感謝申し上げます。

なお、本論文は日本老年看護学会第 17 回学術集会において発表した内容に加筆修正したものである。

文献

- 1) 古城幸子, 木下香織: 高齢者理解を深める臨地実習のねらい.新見公立短期大学紀要, 20, 1-8, 1999.
- 2) 木下香織, 古城幸子, 真壁幸子他: 高齢者施設における Incident の特徴-急性期・慢性期医療現場と高齢者の生活の場との比較から-.新見公立短期大学紀要, 24, 161-169, 2003.
- 3) 古城幸子, 木下香織: 看護事故を予防する基礎教育の取組み.第 10 回日中看護学会論文集, 77-80, 2006.
- 4) 岡庭直子: 日本看護協会「介護施設における看護の機能強化に関する検討委員会」報告, 看護.64 (8), 28-30, 2012.
- 5) 前田恵利, 谷村千華, 大庭桂子他: 看護学生の将来の高齢者ケア選択への関連要因.老年看護学, 13 (2), 65-71, 2009.
- 6) 千葉真弓, 原田美香, 細田江美他: 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び.長野県看護大学紀要, 10, 21-32, 2008.
- 7) 千葉京子: 介護老人保健施設実習における認知症高齢者ケアの学び.日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 18, 43-49, 2005.
- 8) 小林紀明, 杉山洋介, 黒白恵子他: 複数の保健・福祉施設における老年看護学実習の学習成果.目白大学健康科学研究, 2, 65-72, 2009.
- 9) 上野まり, 廣川聖子, 間瀬由紀他: 認知症高齢者グループホームでの一日実習における看護学生の学び (第 1 報) 学生の実習記録から.神奈川県立保健福祉大学誌, 6 (1), 3-11, 2009.
- 10) 上野まり, 間瀬由紀, 廣川聖子他: 認知症高齢者グループホームでの一日実習における看護学生の学び (第 2 報) 施設長の意図と実習施設への影響.神奈川県立保健福祉大学誌, 7(1), 3-13, 2010.
- 11) 前掲 1) と同じ
- 12) 木下香織, 古城幸子, 馬本智恵: 老年看護学実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題.看護・保健科学研究誌, 8(1), 169-176, 2008.
- 13) 前掲 1) と同じ
- 14) 前掲 6) と同じ
- 15) 中野雅子, 徳永基与子, 西尾ゆかり: 認知症高齢者との交流場面における看護学生の心理的特徴-プロセスレコードによる内容分析-.滋賀医科大学看護学ジャーナル, 8(1), 34-37, 2010.

Students' Learning from Gerontological Nursing Practice at a Daily Long-Term Care Group Home for Dementia Patients - From the inductive analysis on practice objectives -

Kaori KINOSHITA, Sachiko KOJO, Tomoe UMAMOTO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

The purpose of this study is to inductively evaluate the student's gerontological nursing practice learning at a daily long-term care group home for dementia patients in accordance with the practice objectives, and obtain implications for future training guidelines. Juniors from A Junior College Department of Nursing who experienced the on-site practices in the year 2011 participated in this study. We employed the research method of categorizing the similarities of the findings based on the inductive grouping of the gerontological nursing practice focalization feedback, in accordance to the practice objectives, of which the students enlist at the end of the practice. The learning focalizations raised from the students covered nine practice objectives. To positively accept/understand the elderly, accept/understand the elderly from "group and individual" perspective, specific methods for the elderly dementia patients' care, giving attention to the elderly life stages, and sharing the goals that lead to the future from present, were raised as the characteristic practice learning from the daily long-term care group home which is the actual place of living for the elderly. On the other hand, the improvement on the elderly health and nursing issue learning were suggested as the future education theme.